

今の私にとって、 仕方がない？ これって差別？

樋口 恵子

(評論家・東京家政大学名誉教授)

年末が近づくと、ここ数年来複雑な気持ちで郵便物を点検するようになった。八十年代半ば以降のことだ。それは私が大学を卒業して新人として就職した会社、マスメディアの一角を占めるJ通信社からの新年宴会の招待状である。いわゆる「マスコミ界」の有名人をはじめ多くの関係者が集い合う。この種の新年会があまりないせいもある。場所はだれでも知っている有名ホテルだし、バイキングの美味もまずまず。楽しみに待っている人も多く、私もその一人だった。そこへ行けばリベラルから保守派ま

で、まんべんなく出会うことができ、楽しいひとときを過ごすことができた。

ところが八十歳半ばごろから、その招待状がこなくなつた。もちろん私はどんな基準でも選ばれるようなエリートではない。「元社員」のおかげさまで呼んでもらえただけの身分である。でも、機会があつたので、現役の社員に聞いてみた。これは、当の通信社の「基準」であつたらしい。

「一律に決めていることなので、樋口さんだけ例外にするのはなかなかむずかしいと思いま

す」

今まで考えたこともなかったが、「パーティ定年」、「パーティ適齢期」というものがあることを初めて知った。率直に言って最初は「年齢差別だわ」と腹が立った。元氣だったマスコミ有名人も、年経れば時代の風と共に影響力が

樋口 恵子（ひぐち・けいこ）



1932年東京生まれ。東京大学文学部美学美術史学科卒業。時事通信社、学研、キャンオンを経て評論活動を行う。現在、東京家政

大学名誉教授、同女性未来研究所名誉所長、NPO法人高齢社会をよくする女性の会理事長。著書に『老くい、どん！あなたにも「ヨタヘ口期」がやってくる』（婦人之友社）、『老いの福袋』（中央公論新社）、『90歳になっても、楽しく生きる』（大和書房）ほか多数。

衰え、新人が台頭してくるのは当然の話。生き馬の目を抜く敏感さがなかったら、マスメディア自体生き残れないだろう。半ば納得しつつ、旧知の人と出会う機会が減った私は「仕方がないけれどつままないの。やっぱり高齢者排除だわ」と老いをかこっていた。

そんなとき、私が考えを変えざるを得ない場面に会った。高齢者医療にかかわる欧米の大先生が数日来日されて、主催者の企業が総勢三〇四十人の内外の専門家を招き、ミニ講演会とお食事を企画し、私も招かれた。

出席者は企業人にせよ学術関係者にせよ一定の業績をあげた人ばかりだから平均年齢六十代だったと思う。私のお隣は、日本の高名な現役の医学関係の大先生。実年齢は私より二、三歳年長。このグループの中で最年長だったかもしれない。もちろん現在も大活躍、私はお顔を存じ上げている程度だったが、丁寧に一礼して指定された隣席に座した。

——そのうちに、隣席の大先生が何か食物にむせたらしく、咳込まれた。だれでもよくあるこ

とだから最初はだれも気にしなかったが、なかなか治まらない。私は大先生の隣席で十人弱のそのテーブル唯一の女性。こういうときホテル側の従業員が別室にご案内するかと思つたが、ホテル職員は何ごともなかったように食事のサービスを続けている。情けないことに私は海外留学の経験もない国際オンチ。こんなときすぐ隣席の客としてどうするべきか全くお手上げである。大先生の意に反して私が人呼んだりしたら、それこそ越権行為というものである。

長い長い時間が過ぎて、その間、大先生の咳込む声以外は食器の音さえ控え目であった。ようやく大先生の咳は静まった。あのととき、隣席の客として私はどうするのが正解だったのか、まだ学ぶ機会がない。今度外国のマナーに詳しい先生に出会ったら教えを乞うことにしよう。

高齢者の病気のひとつとして誤嚥性肺炎がよく話題になる。食事を嚥下する時、食道でなく气管のほうに「誤嚥」してしまい、咳込んだり、

ときには誤嚥性肺炎で死亡に至ることもある。年をとつたら、ゆつくりと、一口の飲み込みを自覚して丁寧に行うことが必要である。

ここで私は、古巣のJ通信社の新年宴会定年を肯定する気になった。高齢者は誤嚥を起しやすいのである。きっとその通信社の総務担当者が「招待者八十五歳定年」を決める前に何件か、高齢者の小さな事故が積み重なっていたのではないか。

「ま、いいか。仕方がないわねえ。老化の必然だけど」

今年も早師走。喪中につき年賀欠礼の知らせが続々と届き始めた。この二、三年は訃報を知りながら、こちら健康万全とは言えずお別れ会にも参列できなかつた例が増えている。

J通信社からの新年会パーティーの招待状はことしもやつぱり来ない。もはや納得である。